

自己評価報告書

平成23年 4月18日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520347

研究課題名(和文) 認知モデルにおける主観性と事象構造に関する
アジア諸言語の類型論的研究研究課題名(英文) Cognitive-Typological Studies on Subjectivity
and Event Structures in Asian Languages

研究代表者

上原 聡 (UEHARA SATOSHI)

東北大学・高等教育開発推進センター・教授

研究者番号：20292352

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：主観性、認知モデル、類型論、語用論、事象構造、アジア諸言語

1. 研究計画の概要

本研究は、認知言語学によって明らかになった言語の主観性の、特にその命題事象内に表出する程度や様式に関して、言語間の多様性と類型化の可能性を、アジアの諸言語を主に言語類型論の記述的・実証的な研究手法によって明らかにすることを目的とする。

認知言語学の研究によって、言語がそしてその現象が深く主観性(subjectivity)に根ざすものであることが明らかになってきた。言語類型論は、言語研究の対象を個別言語から世界の言語に広げ、語順・形態といった文法的特長によって言語を類型化し、言語の個別性/多様性と普遍性の両面を、実際の言語の記述による検証を経て捉えようとする研究分野である。本研究は、認知言語学と言語類型論の研究者がそれぞれの研究成果を「合流」させることで言語研究をより高い次元のものに進めることを目的とする「認知類型論」の主観性研究と位置づけられる。

2. 研究の進捗状況

現在までに、以下の点について進んでいる。

(1) 主観性の定義：近似の概念として主体性、間主観性(相互主観性)、直示、またそれぞれの変化過程として主体化、主観化、間主観化(相互主観化)との定義上の区別が、それぞれの特徴的な言語現象をもとに可能となった。

(2) 対象となる主観性に関わる言語現象：文レベルの構文に意味区分としての事象で表すと、移動事象と内的状態事象、それらと交差する形で指示表現・敬意表現が挙げられ、アジア諸言語におけるデータが収集できている。

(3) 類型化：主観性の定義上の下位分類、

およびそれらのそれぞれに関わる言語現象の現れ方に言語間の差異が見られ、アジア諸言語においても大きく異なることなどが検証できた。データの分類とそれによる言語類型が進んでいる。

(4) データベース化：資料の収集が出来てきているが、その入力と分析分類が今その途上にある段階である。

(5) 相関性：主観性による言語類型と他の言語類型との相関性に関する分析は、集中的には始めた段階である。

(6) 成果発表：国内外の関連学会でシンポジウムやワークショップを催し、それらの成果を論文集に掲載するという予定で進めているが、以下5.の「代表的な研究成果」のところに示したような成果を得ている。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

(理由)

3年目の年度の終盤まで順調に進展しており、年度末3月に研究代表者が発表者・司会進行他を務め2日間にわたる『主観性シンポジウム』を関西大学で予定し関連学会に案内も出していたが、3月11日に起きた東日本大震災により、シンポジウムの中止を余儀なくされ、これまでの総括およびこれからの展望を一般に公開する形で発表できなかった。また収集した資料のうち、印刷原稿資料の一部が代表者研究室被災のため散乱、研究棟へのアクセス不能となっており、復興に応じて整理し直す必要がある。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの達成度から、特に震災による遅れを取り戻すべく、以下の点に注意し、最終

年度である平成 23 年度の研究を進めて行く。

(1) データ資料の整理、その入力及び類型化のための分析を学生を雇うなどして急ピッチで進め、データベース化を完成させる。

(2) 研究成果の発表として、震災で中止となった『主観性シンポジウム』と同規模のシンポジウムを企画・主催する。言語学だけでなく、脳科学や人工知能、現象学など広範囲の学際的な研究となるよう、関連領域の研究者にも参加を呼びかけ、ディスカッションをオープンな形で行う予定である。本研究課題のテーマとしては、主観性における言語普遍性と言語間差異について議論を深め、その視点から他分野にも貢献できるものになると考えている。

(3) 上記のシンポジウムを経て、研究代表者が中心となり、研究分担者、シンポジウム参加者とともに、日本語・英語それぞれで、論文集か学術雑誌の特集のような形で成果を残したいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

1. 上原聡、「名詞化と名詞性—その意味と形—」、『日本語学』(特集「名詞句の文法」)、招待、Vol. 29-11、pp. 24-38、2010 年

2. Thepkanjana, Kingkarn & Satoshi Uehara、Resultative constructions with “implied-result” and “entailed-result” verbs in Thai and English: A contrastive study, *Linguistics*、査読あり、47-3、pp. 589-618、2009 年

3. Uehara, Satoshi and Etsuko Fukushima、*Masen* or *Naidesu*- That is the question: A case study into Japanese conversational discourse、Kimberly Jones and Tsuyoshi Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*、査読あり、pp. 161-184、2008 年

4. Thepkanjana, Kingkarn & Satoshi Uehara、The verb of giving in Thai and Mandarin Chinese as a case of polysemy: A comparative study、*Language Sciences*.30、pp. 621-651、2008 年

5. Thepkanjana, Kingkarn & Satoshi Uehara、Directional verbs as success markers in Thai: Another grammaticalization path、Anthony V.N. Diller, Jerold A Edmondson and Yongxian Luo (eds.), *The Tai-Kadai Languages*、査読あり、pp. 484-506、2008 年

[学会発表] (計 15 件)

1. 上原聡、「Langacker(1985)のsubjectivity理論から通言語的な主観性の理論へ」、『日本英文学会第 62 回中部支部大会 シンポジウム「ラネカー視点構図の射程」』、2010 年 10 月 17 日、金沢大学

2. Ono, Naoyuki、“Two modes of argument selection in nominals.” 20th Japanese/Korean Linguistics Conference. 2010 年 10 月 1 日、Oxford University, U.K

3. Satoshi Uehara、“The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspective: Pronoun drop in English, Thai and Japanese, or not?”、Chulalongkorn-Tohoku Cognitive and Typological Linguistics Symposium、2010 年 8 月 27 日、Chulalongkorn University, Thailand

4. 上原聡、「主観性についての言語対照—認知言語学と類型論のコラボ」、『東北大学大学院国際文化研究科付属言語脳認知総合科学研究センター公開ワークショップ：認知的アプローチと言語類型論の融合』、2010 年 2 月 6 日、東北大学

5. 上原聡、「頻度が形作る活用形態の(不)規則性-用法基盤モデルの観点から-」、日本言語学会第 137 回大会「言語変化のモデル」公開シンポジウム、2008 年 11 月 30 日、金沢大学

6. 上原聡、「認知形態論の基本的考え方紹介：用法基盤モデルにおける語形成」、形態論・レキシコン研究会 (MLF 2008)、2008 年 7 月 6 日、神戸大学

[図書] (計 1 件)

1. 小野尚之 (編著)、ひつじ書房、『結果構文のタイポロジー』2009、487 ページ、